

例えば、まちなか未来住宅。

密集地で培われた工夫と技術。

「まちなかにこそモデルハウスを」。この「まちなか未来住宅」の始まりはこんな想いからでした。なぜなら、京都には細街道(狭い道)や狭小敷地(小さな敷地)、狭小間口(細長い土地)といった敷地が多く、建替えの際にも、密集した建物や狭い道路との関係を調整しながら建築をする必要があるからです。旧市街地に見られるこのような土地は、広い敷地空間のある住宅展示場と違い、家を建てるのに厳しい制限があります。市街地の宅地に相隣関係を無視して建築プランを構築することはできません。拙劣ともいえる居住環境、密集地に建てる

住宅だからこそ、採光や合理性、相隣関係について高度な工夫が必要になります。建物の維持管理や耐久性、防犯や安全性についても深く検討された建て方が必要なのです。今回ゼロが建築したモデルハウスには、そういった数々の困難と実際に立ち向かい、解決してきたゼロ独自の技術がいっぱい詰まっています。そして、そこに「30年先の未来」という新たなコンセプトを加えて、「まちなか未来住宅」は誕生しました。ゼロの確かな技術の一つひとつ、全社をあげて出し合ったアイデアを、どうぞご覧ください。



1. まちなか未来住宅全棟
2. 木を取り囲む中庭
3. 木質のある暖か目の部屋
4. 太陽光発電
5. 吹き抜けのあるリビング
6. 和室のあるファミリールーム



1. 異人館全棟
2. 木取りの2階の部屋
3. 吹き抜けの開放的な空間
4. 和室
5. サラームとファッショデザイン

例えば、神戸・異人館再生。

「建てて売る」だけじゃない。

「壊してしまうのは可哀想」。この異人館の再生を決断した理由はこんな気持ちでした。当初、解体し新しい家を建てようとしていた私たちの企画をこんな風に覆したのは、私たちが隣の敷地で住宅を建てていた時、ずっとそれを見守ってくれていたこの建物に残る、古い記憶のせいかもしれません。かつてポリア領事館だったというこの異人館は、築百年あまりを経て、激しく老朽化していました。以前、京都で行った大原での古民家再生を思い起こし、この再生工事の大変な苦勞は容易に想像できましたが、それでも、少しずつ息を吹き返していく建物の表情に感じる喜びの大きさも知っているから

こそ、私たちは決断したので。職人や現場監督、設計が一丸となってこの異人館を生き返らすために力を尽くしました。修復をしていくにつれ、かつてこの建物で過ごした異国人の息づかいを感じるようになり、少しずつ息を吹き返していく家に触れながら、小さな喜びが大きな喜びとなっていきます。そして再生を完了した今、永い間眠っていたこの建物は再び目を覚まし、周囲の環境と共に新たな記憶をつくり始めました。新しいものを建てるだけでなく、土地の記憶や環境を読み解き、その流れの中に新しい歴史を刻んでいく。これも、街づくりに関わる私たちの想いなのです。

